

広島市立大学学術リポジトリ

狩猟採集社会の自然資源の利用と保全：
縄文時代の人間と自然の関係を中心にして

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中島, 正博, NAKASHIMA, Masahiro メールアドレス: 所属:
URL	https://hiroshima-cu.repo.nii.ac.jp/records/280



狩猟採集社会の自然資源の利用と保全

—縄文時代の人間と自然の関係を中心にして—

中 島 正 博

Utilization and Conservation of Natural Resources in a Hunter-gatherers Society

—Man and Nature Relations in Prehistoric Jomon Period—

Masahiro NAKASHIMA

This paper considers a man-and-nature relation through a hunter-gatherers lifestyle in the Japanese prehistoric Jomon period. The Jomon people developed their lifestyle by hunting and gathering natural resources in the forests, rivers and seas in the Neolithic Age, when the forest widely regenerated after the glacial period. They utilized natural resources not only by collecting resources but also growing and processing them. Because of these active operations upon the nature, there was strain between man and the nature due to overuses and among peoples for the access to the resources. The Jomon people developed communities where a social order was imbedded to sustain the nature and people's life, i. e., coexistence of the nature and man. By considering hunter-gatherers lifestyles in the past and present, it is thought that the Jomon people looked upon the nature as cyclic lives repeating life and death and as well as partners whom they had to associate or even negotiate with. Since nature's prosperity was vital for the people's life, they associated with the nature to enhance her prosperity by spiritual attitude of thank, awe and respect with such an expression as offerings. These are Jomon people's views on the nature and life and on their man-and-nature relation.

はじめに

- I. 縄文時代の自然利用
- II. 自然利用と縄文社会
- III. 縄文文化と自然観

IV. 狩猟採集から農耕の社会へ

- V. 人間と自然の交渉
- おわりに

はじめに

人類が現在直面している「環境問題」を契機にして、私たちは改めて人間と自然の関係の在り方を考える必要に迫られている。1970年代以降に、特に盛んになった環境哲学や環境倫理学に関する言説は、そのことを如実に示している。本稿でも人間と自然の関係、そして人間の自然観が中心的な関心である。

ここでは縄文時代の人々の生業を考察することにより、縄文人と自然の関係、縄文人の自然観などを探りたい。

まず私の問題意識を述べたい。「自然環境破壊」は人類の歴史において、農耕文明と同時に始まったと言われている¹。また農耕を基礎にした古代文明衰退の原因として、森林や農地の自然破壊が指摘される²。しかし文明以前の先史時代に、人間による自然破壊はなかったのだろうか。たとえば日本列島

で農耕が始まる前の縄文時代に自然破壊はなかったのだろうか。その点で縄文時代における人間と自然の関係を「共生」のモデルとして評価する言説³がある。アニミズム的な自然観を基礎に、人々は自然環境を破壊することなく、また農業のために自然を改変することなく、狩猟採集の生業を一万年の間続けたことがその根拠である。しかし縄文人と自然の関係や彼らの自然観はまだよく知られていない。またその「共生」の内実とはいかなるものであろうか。もし縄文人と自然の「共生」が事実であったとすれば、現代の人間と自然の関係の在り方を考える上で、縄文文化に何らかの示唆を求められるだろうか。狩猟採集という人類の出発における生業の中に、私たちと自然との関係を考える、原点らしきものが見つからないだろうか。このような問題意識を基にして、縄文時代の「人間と自然の関係」について本稿で考察したい。

縄文人による自然への働きかけを記述する試みは、主に考古学や人類学の研究者によってなされてきた。本稿の主題に関連の大きい研究成果を以下に簡単に紹介する。例えば、安田（1989, 1995b）は環境考古学の研究成果に基づいて、縄文時代の日本列島の森林分布や植物資源利用について紹介している。また多様な分野の研究者が縄文時代の人々の自然観について論じている。例えば哲学の梅原（1995）、古典学の吉田（1995）、民族学の小山（1995）などが『日本人の自然観』（1995）に論文を寄せている。考古学の立場から縄文人の世界観に言及しているのは小林（1994, 2001）や佐原・小林（2001）などである。また小林（1994）は縄文人による自然資源の利用の特徴や、彼らの道具に表現された世界観を論じている。安田（1996）はアニミズムと一神教の対比において、古代人の自然観の変化を論じている。

人間と自然の関係において人口増加の影響は大事な論点である。小池（2000）は狩猟採集活動において人口増加が魚介類やほ乳類の捕獲に及ぼす影響を調査している。人間と自然の関係を探る観点から、宮地（1999）は集落と食料採集領域の位置関係を調査して、縄文人の食料資源の獲得戦略を論じた。小野（2000）は遺跡の資料を分析することによって、狩猟採集民が自然環境に応じて主体的に生業を選択した可能性を論じた。山田（2000）は「人類—環境関係」の観点から、定住の開始に伴う自然資源利用の技術開発について、それは縄文人による「環境適応」というよりも「環境交渉」であると論じた。これらの小野・小池・山田の論文は『環境と人類 自

然の中に歴史を読む』（2000）の中に収められている。

狩猟採集民と自然資源との係わりについて、人類学の多数の研究者がさまざまな観点から興味深い討論を展開している（大塚 1994）。経済人類学の山内（1994）は「未開社会」の経済を研究することで、文明社会の経済の「利潤原理」とは別のパラダイムの存在を明らかにした。すなわち人と人の社会関係や人と自然の間関係を貫く「贈与原理」である。経済史の湯浅（1993）は、世界の歴史を通して人間と環境の関係を考察しており、先史時代の人口爆発と農業革命にも言及している。比較文明の伊東（2002）は、プレアニミズムから始まる自然観の変貌を、人類の文明の転換と結びつけて概観している。

筆者の問題意識に係わる先行研究の成果はおおよそ以上の通りである。本稿は狩猟採集社会のなかでも特定の縄文時代を扱ったので、日本語文献のみを対象にレビューした。先に紹介した伊東・大塚・佐原・小林・安田・山内・湯浅などは狩猟採集社会全般も視野に入れた議論をしている。本稿の主題に照らして、外国語文献のレビューを含めなくても、重大な知見を見落とすことはない判断した。

これらの研究成果はいずれも本稿の主題（縄文時代の人間と自然の関係）に関連するものであり、それは部分的な知見を提供するものの、先に述べた筆者の関心に直接的に答えるものではない。本稿の目的は、ここに示した先行研究の成果を材料にして、縄文時代の人間と自然の関係を私なりに読み解く作業を行うことである。異なる研究分野の成果を横断的に整理して、縄文時代の人間と自然の関係の全体観を論じた試みは数少ない。縄文人と自然の関係の諸局面を探ることを通して、筆者の問題意識の答えを見つけながら、縄文人の自然観を浮き彫りにしたい。それによって既存の研究成果に対する、筆者の貢献が可能になるであろう。

本稿の構成は以下の通りである。第Ⅰ章では縄文時代の自然生態系、その自然を利用し生活するための生業、自然資源を利用する技術、などの特徴について述べる。第Ⅱ章では自然資源の利用に伴う定住化や社会制度について考えたい。第Ⅲ章では縄文人の世界観と自然観を探りたい。縄文人は自然をどのような存在として捉えていたのだろうか。縄文人の残した道具や蛇信仰などを手がかりに考えたい。一万年続いた縄文時代がなぜ終わり、次の弥生時代が始まることになったのか。それを考えるために第Ⅳ章では東日本と西日本の違いに焦点を当てながら時

代の変化を考えたい。縄文人から私たちは何を学べるだろうか。「人間と自然の共生」という私たちに突きつけられた課題に対して、縄文時代は何を示唆するだろうか。第I章から第IV章で得られた知見を基にして、第V章ではこの問いについて考えてみたい。

I. 縄文時代の自然利用

縄文時代に人はどのように自然を利用していたのだろうか。縄文時代の自然生態系、その自然を利用し生活するための生業、自然資源を利用する生業の技術、などの特徴について述べたい。

1. 縄文時代の位置づけ

約8万年前から最後の氷河期が終わる頃までが後期旧石器時代と呼ばれ、この時期に新人つまりホモサピエンスが誕生した。後期旧石器時代の終末期は降水量の少ない寒冷期であったが、氷河期が終わった1万3000年から1万2000年前の後、気候の温暖化と降水量の増大によって、日本列島の植生は森の時代へと変化した。そして人間の歴史は後期新石器時代へ移行したのである。

氷河期の終了に伴い日本列島の生態系は変化した。温暖化による縄文海進と呼ばれる海面上昇が起こり、海岸線は陸地に入り込み、日本海には対馬暖流が流入し冬季の降雪量が増加した。その結果、日本列島の西部は照葉樹林帯⁴、東部は落葉広葉樹林帯となった。この森林の拡大と人間によるその利用こそが、多様な動植物を対象にする狩猟採集、磨製石器等の道具類、定住などの文化を生み出した主要因であった。すなわち自然環境の変化に対する人間の適応の結果が縄文文化なのである。

縄文時代は、地理上は日本列島に限り、時間上は1万3000年から2200年前までの時代の名称である。旧石器時代に続く縄文時代は農耕社会の始まる弥生時代の前である。世界史の上でこの時期は新石器時代に区分され農耕が始まった時期である。しかし縄文時代の主な生業は狩猟採集である⁵。縄文時代に植物の栽培や動物の飼育は行なわれたものの農耕社会ではなかった。そのような縄文文化は、狩猟採集社会の旧石器時代あるいは農耕社会の新石器時代、そのいずれにも分類しにくい、両方の要素を備えた日本列島固有の文化である。

2. 自然と気候の変化

縄文時代の日本列島の主な森林植生は落葉広葉樹林と照葉樹林であった。列島の北から南西の方向に緯度と標高によって、亜寒帯針葉樹林、冷温帯落葉広葉樹林、暖温帯落葉広葉樹林、照葉樹林などの植生型に区分できる⁶。これらの植生は縄文時代を通して一定ではなく、気候の温暖化や冷涼化、そして雨量の変化などによって森林分布も変化した。縄文時代早期や前期に、東日本は落葉広葉樹林地帯に属し、西日本は照葉樹林地帯に属する地域が多い。落葉広葉樹とは主にブナやナラ、コナラやクヌギ、クリなどであり、照葉樹とはカシ、シイ、ツバキ、ミカン、茶などである。

ブナ帯を初めとする落葉広葉樹林は自然の恵みが豊富である。狩猟の対象となる鳥獣や採集の対象となるキノコ、山菜、木の実などに恵まれている。またサケやマスなどの水産物までもブナ帯のものである⁷。それに比べて照葉樹林の恵みは少ない。

約1万年もの長い期間続く縄文時代に、日本列島の気候や生態環境は大きな変化を経ている。1万年前に始まった温暖化は6000年前にピークに達した。続いて寒冷化が縄文時代の中期、5000年から4000年前に始まった⁸。温暖化による海水面の上昇は続く寒冷化で海水面の下降に転じた。

縄文人が依存していた自然生態系は、冷涼化によって生活に不利に変化した。海水面の低下によって海岸線が退き、水産資源が居住地付近から遠くへ離れた。その結果、縄文中期には沿岸地域の居住地が放棄され、中部地域などの内陸に遺跡が集中した。内陸地域では海の資源をあきらめる反面、クリやドングリを栽培する技術を発達させて、シカやイノシシなどの動物を狩猟する生業が中心となった。

海水面の下降は4000年から1600年前まで続いた。温暖化による森林の拡大により縄文時代が始まり、寒冷化による生活環境の悪化で縄文時代が終了したと言えるであろう。海水面の下降によって海岸線が後退し海底の土地が陸地化した。そして河川の堆積作用で沖積平野が形成され、2200年前に始まる弥生時代の稲作耕地拡大の条件が整えられた⁹。

3. 狩猟採集活動の特徴

縄文時代の生業は狩猟採集である。海や河での漁労、貝類の採集、山野での堅果類の採集、狩猟などを組み合わせて、一年を通じて食料資源の獲得の活動を行っていた。狩猟の対象は主にシカとイノシシであるが、日本列島に生息するほとんどすべての哺乳

乳動物を食用にした。水産物なども網羅的に多種多様な資源を利用した。その他、鳥類や昆虫の利用も行われていた。植物資源の利用も多種多様でありその数は数百種類に上ったと考えられている¹⁰。なかでもクリ、クルミ、ドングリなどの堅果類は主食品を構成していた。これらの堅果類は冬季の食料欠乏期のために備蓄された。

縄文人の食料獲得の最大の特徴は、すべての動植物資源をできる限り利用しようとする態度である。それは食料獲得の安定性を保障すると同時に自然生態系のバランスを維持する効果ももたらした。この態度は捕獲のしやすさや味覚上の好みに左右されない。それは縄文人の単なる雑食性の表われではなく明確な方針であったようだ¹¹。

植物資源の栽培と動物資源の飼育もこの時代に行われていた。それは農耕牧畜文化としての栽培や飼育ではなく、狩猟採集文化を構成する多様性の一形態として位置づけられる¹²。青森県三内丸山遺跡などいくつかの遺跡からは、栽培されたクリ林の存在を示唆する遺物が出土している。飼育された最初の動物はイヌである。それは縄文早期に始まるとみられ、イヌの遺体が丁寧に埋葬された遺跡も存在する。イノシシも飼育されたことが貝塚からの出土遺物によって判明している。

これらの食料獲得戦略や備蓄、植物栽培や動物飼育などの活動は人間が主体的に生み出した営みである。縄文時代の狩猟採集の生業は単に自然の恵みを享受するのみの自然経済のレベルではなく、積極的に自然に働きかけて自然を人工化したことを示している。

4. 資源利用技術の進歩と定住化

人々は自然資源を有用化し活用する手段を発達させた。土工具、木工具などは森林を切り開いて村を作り住居を作る道具である。自然資源を加工する磨製石器、木器、土器の発達は、獲得し利用できる自然資源の種類を拡大する。これら道具の発達は人が自然環境に働きかけ、その環境から資源を取り出す能力を拡大するものである。

このような資源利用技術の進歩は定住化の努力と深く結びついている。すなわち資源獲得のために狩猟採集の対象を求めて移動を繰り返すのではなく、定住したその周辺で利用できる資源の種類を広げ、さらに資源の利用方法を改善する努力がなされたのである。さらに定住を可能にする道具の製作そのものが同時に定住を促進した。なぜなら資源の獲得や

加工に使用する磨製石器、木器、土器などの製作は複雑な工程を要するので、定住する方が有利だからである。

計画的な食料備蓄も縄文文化を特徴づける資源利用技術である。食料備蓄は食料確保の安定性を高めて社会の定住性を高める。貝塚の分析によって、貝採りの量は毎日の消費量を上回り、将来の食料備蓄が含まれる場合があったことが分かっている¹³。また秋に収穫される堅果類も備蓄に適した食料であった。食料を備蓄するには、対象とする食料の大量の確保と保存技術や備蓄場所が必要である。植物の栽培や動物の飼育は生きたままの備蓄と見なすこともできる。

食料資源を加工する技術の進歩も定住性を高める。堅果類の粉碎や製粉に使用される石皿や磨石は縄文早期以降多数発見されている。また煮炊きを使用する土器は縄文時代最大の発明である。生の状態ではシブやアクが強すぎて人が利用できない堅果類も、煮炊きする料理により利用できる資源になった。縄文人たちの生活に必要な道具や生産道具は、縄文早期の中頃までにはほぼ出そろったようである。

狩猟採集の縄文文化は自然資源の単なる享受と利用ではなく、自然環境に対して人工的に働きかけることにより、自然の資源化が図られたのである。

II. 自然利用と縄文社会

生業のための資源利用手段の発達と共に、人間は社会的な機能も発達させた。狩猟採集経済にも係わらず定住化が進み、人口の増減に応じて動植物の捕獲圧力が調節され、集落人口の増大に伴い社会関係が発達した。縄文文化の発展に伴うこのような自然利用の社会的な側面を考えたい。

1. 定住の発達

狩猟採集経済はもともと獲物を追って移動する生業であるが、縄文時代早期から日本列島の人々は定住のための試行錯誤を続けた。居住の継続性は季節的かつ一時的なベースキャンプから、年間を通して継続する集落、数年間あるいは世代ごとに居住する集落、そして幾世代を通して続く村のような段階がある。食料獲得のための資源利用技術や生活技術、集落建設のための森林開拓技術などを発達させながら、定住や集落形成を安定させていった。

縄文時代早期から定住に近い住居跡が各地で発見されている。例えば鹿児島県の掃除山遺跡や榎ノ原

遺跡では、縄文早期1万1000年前の住居、貯蔵・調理施設、木の実加工具などを備えた居住地が存在した。鹿児島県上野原遺跡では関東の縄文遺跡よりもはるかに古い縄文早期9500年前に定住に近い集落が営まれていた。日本列島には1万年から8000年前にかけて、九州南部から北海道まで、継続性のある集落が出現していた¹⁴。そして定住の度合いは各地で次第に強まっていったと考えられる。定住とその人口規模の増大に伴い、村や集団の維持に係わる儀礼装置をもつ社会も展開していた。

縄文前期5500年前の青森県の三内丸山遺跡では、人口規模500人の可能性のある大きな集落跡が発見された¹⁵。その遺跡からは巨大な竪穴住居跡、1500点以上の土偶、墓、そして物見やぐらを思わせる高い建築物跡などが出土した(安田1996:233)。また遺跡の周囲には栽培用のクリが植林された可能性がある。この集落は1500年間続いたが4000年前に気候の冷涼化とともに途絶えた¹⁶。このように縄文前期から中期にかけて、当時の技術で入植可能な日本列島のほとんどの地域で集落が発達した。

縄文時代の人口分布は遺跡の密度から推定できる。縄文時代中期の遺跡密度は中部と関東の遺跡密度が最も高くおよそ1遺跡/平方キロメートル、それ以北の北日本・東日本では1遺跡/10平方キロメートル、それ以西の西日本ではおよそ1遺跡/100平方キロメートルである¹⁷。東日本の高い人口密度の分布は、狩猟採集経済に有利な落葉広葉樹林帯の分布と一致している。これらの人口密度は狩猟採集経済としてすでに限界近くに達していたと思われる。なかでも遺跡が非常に多いのは長野県¹⁸であり、縄文中期4500年前の気候の冷涼化による人口集中化現象の結果と考えられている。

農業経済学者ボスラップによれば、生産形態による土地の食料生産力から推定すると、狩猟採集民と初歩的な農耕民の人口密度は0~4人/平方キロメートルである¹⁹。これと比較すると関東地方の1遺跡/平方キロメートルは異常に高い人口密度である。当時の集落は人口30人から50人程度と推定されているからである。

2. 人口と資源の捕獲圧力

縄文人が定住するようになり、集落の人口規模は大きくなっていった。それにより狩猟採集の対象となった動植物などの自然資源に何らかの影響はあっただろうか。人口規模が拡大するに従って、自然資源に対する捕獲圧力は強まるはずである。それぞれ

の集落は自然資源獲得の領域を拡大する過程で競合しなかっただろうか。はたして自然の生態系は持続的に利用・保全されただろうか。宮路(1999:24-43)や小池(2000:39-46;110-114)²⁰の研究成果を基にこのような疑問の答えを探してみよう。

人口増加の影響は自然資源の捕獲圧に現れる。すなわち人口が増加して環境収容力のレベルに達すると、捕獲される動植物の成熟固体が減少する。例えば遺跡の貝塚において、捕獲された貝類の未成熟固体が増えれば、その集落による乱獲が推測される。また動物の捕獲圧が限界に近づくと、メスの捕獲が制限されるなど狩猟に対する規制が行なわれる。縄文早期から晩期、さらに弥生時代までの遺跡を対象に行なわれた小池の調査によれば、シカの捕獲圧の増減は縄文早期から晩期までの各時期で起きている。つまりシカの過剰捕獲による減少と、捕獲制限による個体群の回復が繰り返されていた。縄文早期から晩期の何れの時期でも、集落人口と自然資源の緊張関係は存在していたのである。シカの捕獲限界をやや超えて捕獲圧が限界状態に近づいた遺跡は、いずれも関東地方の縄文晩期である。当時の関東地方の人口圧力を示すものであろう。なお集落人口の増減や捕獲圧は、他集落との社会関係や地域資源の変動にも左右される。つまり捕獲圧は集落人口と自然資源のみの単純な関係ではないことに留意すべきである。

次に資源獲得の領域拡大による集落間の競合の可能性をみてみよう。宮路は大阪湾沿岸地域の縄文前期、中期、後期の遺跡について、それぞれの食料資源獲得の領域を推定した。縄文前期の遺跡²¹の食料残滓からは季節ごとに移動する居住形態が推定された。縄文中期の遺跡²²の食料残滓からは通年にわたる定住型の集落の存在が推定できた。縄文後期の遺跡²³から出土した食料残滓を中期のものと比較すると、後期には定住集落の規模が大きくなり、漁を行う領域も拡大しており、漁の方法には協業的な発展がみられた。縄文前期と中期の資源領域はいずれも集落間で重ならなかったが、縄文後期には資源獲得の活動範囲が広がったため、幾つかの集落が同じ干潟を共有したようである。

3. 社会関係の発達

(1) 社会組織の形成

縄文時代の人と自然の関係を考える上で、どうして人と人の社会関係が問題になるのか。それは人が自然を利用する様式、つまり人と自然の関係のあり

方は、人と人の中でのほとんど規定されるからである。人々が集団を作ればそれは単なる烏合の衆ではなく、役割ができてリーダー的な存在が現れ、ルールが形成されて社会生活が営まれる。集団が食料獲得のために自然に働きかける時、あるいは集団が他の集団との間に関係を結ぶ時、人間社会には秩序や組織化が要求される。そのような社会を縄文人はどのように発展させたのだろうか。

集団生活の中で次第に役割分担が生まれ、得意な道具作りの分野で専門化が生じ、狩猟採集活動において分業や協業が行なわれたであろう。特に大型獣の捕獲には緊密な組織の下で共同労働が必要であった。動植物などの自然資源の季節性に依りて、狩猟採集活動は計画的に行なわれるようになる。生態系への理解が深まるに従い、禁猟期間、禁猟区、メスや若い動物の禁猟など、社会的な規制も発達したに違いない。捕獲量の増大に伴う社会的規制は人間の共生の知恵であろう。

これらの生産の他に流通の経済活動も発達した。先に紹介した青森県の三内丸山遺跡では、糸魚川付近か中国大陸でしか採れないヒスイが遺物の中に発見されており、当時の流通の広域性がうかがわれる。物資のやり取りや人の婚姻関係などによって、近隣や遠隔地の集団との関係が形成される。集落の間で食料資源獲得の領域が共有されることもあった。このようにして婚姻関係や経済社会生活の共有によって、集団の血縁・地縁関係が形成され拡大する²⁴。

社会関係の発達を示す縄文時代の痕跡として集会所施設、儀礼用具などがある。三内丸山遺跡では200人以上を収容できる集会所のような建物の跡が存在する。東北地方では縄文後期から晩期にかけて、遺跡の集会所施設が大きくなり、儀礼用具が増加し、墓地が大規模になっている。その傾向は関東地方や近畿地方でも確認されている（山田2000:109）。

このような社会関係の発達を示す痕跡から、縄文時代においてすでに社会組織が発達していたことが窺える。そのような社会組織や制度の存在は、人と自然の関係、なかでも人が自然に働きかける方法を調整するための前提条件である。集落内そして集落間の利害関係の調整が、社会組織と制度によって可能になるからである。資源の獲得を目指した生存競争の段階を経ることはあっても、その後、調整によって共存と協調を指向しなければ集団の存続は危うくなる。

(2) 縄文人の社会関係の特徴

さて縄文時代に人々はどのような社会関係を発達させたのだろうか。それは平等社会だったのか、あるいは階級社会であったのか。先史時代の社会関係を推測することは容易でないが、一般に信じられているのは、狩猟採集社会の平等な関係性である。そして弥生時代に入って農耕を開始した時に、余剰生産が発生し持てる者と持たざる者の階級が生まれたと考えられてきた。ところがこの時代に食料が備蓄されていたことは前述の通りである²⁵。

しかしながら一般に縄文社会は平等関係であったと考えられている。特に遺跡に見られる埋葬において、誰も特別な葬方をされていないことが、平等社会の痕跡として挙げられる（安田1996:247）。また人が人を殺す武器は縄文時代に存在しなかった²⁶。人が人を支配したり殺しあつたりすることのない世界観の中に縄文人は生きていたのだろうか²⁷。後の弥生時代には環濠集落として、堀や土堀で集落を囲み、外敵に備えていたが、縄文集落はそのような防御施設をもたない。後で述べるように、全ての自然に神の存在をみるアニミズムが縄文時代の世界観であった。安田によると、そこでは人も自然も命は平等であり、階級はなかったのである²⁸。

狩猟採集社会では経済関係よりも社会関係が支配的であると山内（1994:90-93）は述べている。つまり人は家族の一員として、また氏族や集落の一員として労働するのであり、社会関係の実践の一環として労働や生産を行なう。その他の社会関係の営みは、儀礼、祭り、踊り、休息、スポーツ、芸術活動、趣味、おしゃべり、社交、旅行など生活を楽しむことである²⁹。言い換えれば、社会関係の中に経済関係が埋め込まれており、社会生活が目的であり経済生産は手段である。社会関係の一部として経済関係が営まれているのであり、現代社会のように経済関係が社会関係を支配しているのとは異なる。

その社会関係を貫徹しているのは相互依存関係であり、「贈与」とそれに対して返礼をする互酬交換法則が、その社会関係を成立させる原理である。持てるものが持たざるものに贈与することで平等社会が維持される。たとえ一時的に贈与が偏っても、長期的には互酬交換が成立する。現存する狩猟採集社会でも贈与によって平準化が保障されている。贈与は人と人の社会関係を形成すると同時に、人と自然の関係を取り結ぶ原理でもある。それは次章で述べることにしたい。

Ⅲ. 縄文文化と自然観

縄文人は自然をどのような存在として捉えていたのだろうか。縄文人の残した道具や蛇信仰などを手がかりに彼らの自然観を考えたい。

1. 縄文人の道具と世界観

(1) 縄文人の自然観

縄文時代の人々の自然観はどのようにして窺い知ることができるだろうか。先に述べた縄文人の生業にも彼らの自然観が表れている。例えば森林資源を利用するために製作した道具類は、人工を加えて自然を開発する人間の積極的な態度の表われである。また彼らが食用にしていた動植物の網羅的な利用に注目すると、自然生態系のバランスを維持しようとする努力が想像できる。人口増加の影響で狩猟の捕獲圧が高まり、動物資源が減少した時には、人々は社会的規制による捕獲制限などで資源の回復を図っていた。これらのことから、自然生態系に関する縄文人の豊富な知識と、共生の戦略を窺うことができる。人々は自然を自由に利用できたわけではなく、人間と自然の間にはある種の緊張関係があったことも、当時の共生戦略は示している。

人と自然の関係は、人々の生業や生き方として表れており、それは文化現象である。縄文人の自然利用の態度は、確かに彼らの自然観を表していると言えるだろう。では彼らは自然をどのように認識して、自然に対してそのような態度をとったのだろうか。つまり縄文人は自然をどのような存在として捉えていたのだろうか。彼らの自然観を成り立たせている自然の姿は何だろうか。彼らの世界観に迫ることによってその自然観を探りたい。

(2) 道具と世界観

縄文人の世界観は彼らが形に表現したモノに残されている。木を切り倒したり削ったりする機能をもつ道具が出土するが、そのような実用的な機能を容易に推し量り難い類の道具もある。典型的な例は土偶である。縄文中期から土偶の出土が急増するが、いまだにその用途や目的には定説が無い。その他、同様の用途不明の遺物は呪術や儀式に用いられたと考えられることが多い。道具の用途を私たちが判断できないのは、縄文人と世界観が互いに異なるからであろう³⁰。

縄文土器はドングリなど食料の煮炊きに使用され

た。その煮炊きの目的のためには、縄文土器に施された装飾は物理的には不要である。機能的にはまったく余分だが、非常に豊かな装飾が縄文土器に施してある。機能的に不要の装飾を加えるのは、製作者が自分たちの世界観を主張するためであろう³¹。土偶や縄文土器の装飾にはそのような縄文人の世界観が象徴されていると考えられる。土偶や縄文土器から想像される世界観と、当時の人々が暮らした社会・自然状況を重ね合わせると、縄文人の自然観が浮き彫りにされるだろう。

(3) 縄文時代の蛇信仰

縄文時代は森林の拡大と共に始まった。森は、太陽エネルギーの恩恵を受けて、植物とそれに依存する動物など無数の命が生まれては死んで行く、循環の場である。そのような森の中で「循環する世界」の意識が、縄文人に育かれたのではないだろうか³²。生き物である人間もやはり循環の存在として認識されただろう。

狩猟採集民が持つ世界観は多くの場合アニミズムである³³。つまり生きとし生ける動物植物の命に精霊を認め、山や河や海の自然にもまた精霊が住む。古代世界には広く蛇信仰が見られ、その蛇はアニミズムの象徴である。縄文時代の日本でも蛇は神であった。縄文式土器や土偶にはマムシを図案化した文様がつけられている。

蛇は森の生命の循環と豊饒の象徴と見なされていた。縄文人の生活資源をもたらす自然は、生と死を繰り返す循環する命の現れであり、大地の豊穡の表われである。山川草木も循環と豊饒の生命であり、世界は循環する生命として認識されたであろう。縄文人の最大の願いは、彼ら自身の命を支えるその自然の豊饒である。このような自然観や生命観が縄文人の世界観を構成していたと思われる。

(4) 縄文土器と土偶の表現

縄文土器に表された文様は縄文時代中期頃から特に豊富になる。土器に蛇の形がはっきり現れるのは中期になってからである。中部地方から関東地方にかけて出土する、勝坂式土器には最も写実的な蛇の像が表されている（小山1995:90）。縄文中期は日本列島の気候の冷涼化が始まる時である。冷涼化と共に海水面の後退が起きて、海岸付近の多くの集落が放棄された。同時に中部山岳地方で異常なほどの人口集中が起きて、自然資源の不足が引き起こされた。この時に中部地方で製作されたのが、豊富な装飾が

施された火焰式縄文土器である。

資源獲得のために他の集落と戦争をしない縄文人にとって、彼らにできることは、狩猟採集の社会的規制を強めて、自然の豊穡を祈ることであろう。その自然の豊穡を祈る願いが火焰式土器に表現されたのではないだろうか。そこに表現された造形は、まさに「湧き上がる生命力」の表現のように見える³⁴。森が豊かになること、森のあらゆる命が沸き出ること、それが彼らの生存を保障してくれる。火焰式土器の豊富な装飾は、彼らの生存がかかっている、森の生命力への祈りの表現ではないだろうか³⁵。

土偶の製作の意図ははっきり分かっていない。出土する土偶に共通しているのは、女性であること、妊婦であること、壊されていて完形は皆無、などである。梅原(1995:22-27)は、土偶は胎児埋葬の表現ではないかと考えている。つまり土偶を作った後わざわざ壊して不完全にして、あの世で完全になって生まれ変わるよう祈るのである。それは生命のスムーズな循環を祈る縄文人の世界観の表現である。また吉田(1995:78)は、土偶は女神信仰の表れであると考える³⁶。つまりアワヤクリを栽培している場所に土偶を埋めて作物の豊作を祈る、そのような信仰があったのではないかと想像する。さらに安田(1996:241-244)は、自然の豊穡を願う生け贄の身代りとして、土偶を製作したのではないかと自説を紹介している。いずれにしても縄文人の女神信仰、そして循環の世界観が表れているように思われる³⁷。

2. 人と自然の間の互酬性

最後に人と自然の間の互酬関係について述べる。人と人との贈与原理については、社会関係を形成する原理として第三章に述べた。山内(1994:191-196)によると贈与は同時に人と自然をつなぐ行為でもあった。それはニュージーランドの狩猟採集民マオリのコスモロジーのなかにもはっきりと貫徹している。森の獲物を受け取ったマオリの狩人は必要以上の過剰なものを森に返さねばならない。「そのおかげで森は超自然的な力である生命力を活性化させ、豊かな自然の恵みを贈与してくれる」のである。古今東西の供物の風習は、自然の神々に対する畏敬や感謝の表現であることが多い。

縄文社会の土偶も、吉田や安田が考えるように、やはり自然への贈与かもしれない。自然への贈与は現代日本人の生活にも生きている。山の神や水の神に対する供物の習慣は、今も一般的に見られる風習

である。古代のアニミズムが脈々と続いているのであろう。自然の恵みに対するそのような贈与は世界中にみられる風習である。

しかし贈与原理は現代の経済活動を貫く市場原理とは矛盾する。市場原理においては、自然は単なる資源の供給源であり、人間は贈与も返礼も何の義務も負わない。それでも自然は恵みを与え続けてくれた。いつのまにか人間は自然を自由に利用する「権利」を手にしたようである。自然に遠慮しながら、自然の生命力の豊かなことを願いながら、自然の恵みを受け取っていたのに、自然に返礼する文化を忘れてしまったのである。

IV. 狩猟採集から農耕の社会へ

これまで縄文時代の人と自然の関わりについて重要な特徴を述べた。なぜ、一万年続いた縄文時代が終わり、弥生時代が始まることになったのだろうか。その変化がなぜ西日本から始まって東日本へ伝わっていったのだろうか。その変化は日本列島の人々と自然の關係に何らかの影響を及ぼしたのだろうか。主に安田の研究成果³⁸を用いながらこれらについて考えてみたい。

1. 縄文文化衰退への動き

(1) 縄文時代の東日本と西日本の森林と生業

縄文時代前期までに東日本では落葉広葉樹林、西日本では照葉樹林が主に発達した。狩猟採集の生業はそれぞれの森林資源の特徴を利用した。東日本の森林資源の利用においては、クリやドングリなどの高木層から食料資源を獲得した。それに対して西日本では、照葉樹林の高木層を焼き払った後の、灌木や草本類からも食料や植物資源を獲得した。すなわちエゴマ、シソ、リョウトク、ヒョウタン、ゴボウ、アサなどの栽培が行われた。西日本の照葉樹林帯においても、ドングリなどの堅果類は利用されたが、森林そのものから得られる食料資源は貧弱だった。東日本の落葉広葉樹林から得られる食料資源の方が格段に豊富であった³⁹。落葉広葉樹林帯では人間のわずかな干渉によってナラヤクリ林を維持できたが、カシヤシイ類の二次林が直ぐに再生する照葉樹林では、クリやクルミなどのカロリーの高い堅果類を大量に得ることはできなかった。

そのために西日本の照葉樹林帯では森林を伐開して、食用になる草本類が生育する条件を人工的に作り出さなければならなかった。このように東日本と

西日本のそれぞれの森林では人間と自然の関わりが異なっていた。食料としての生産性の低い照葉樹林帯の森は、人間によって切り開かれる運命にあった。そのために西日本では縄文時代の前期以降、原初の農耕、初期的農耕などの農耕文化への一貫した傾向性が見られた（安田1989:94）。

(2) 縄文時代後期・晩期の気候変化と文化の盛衰

安田によると、縄文時代の中期・後期・晩期の気候の変化が、当時の文化の興隆や分布に大きな影響を与えた。最初の大きな気候変動は5000年前の冷涼化である。その影響は、東日本で中部山岳地方の山麓に異常なほどの人口集中を引き起こした。日本海側で居住地を放棄した人々も恐らく中部山岳へ移住したであろう。西日本の照葉樹林帯でも気候冷涼化の影響は認められる。中国地方では、広島県帝釈峯など内陸部の遺跡が縄文中期に急減して、瀬戸内海沿岸の遺跡が増加した。西日本の照葉樹林が冷涼化で大きな打撃を受け、人々は内陸部から海岸部へ移住した可能性が高い（安田1989:194-195）。

縄文中期の気候変動により東日本が縄文文化の中心地となった。東日本では、気候冷涼化が人々を落葉広葉樹林帯へ集中させて、縄文中期の文化が興隆した。逆に西日本では、気候冷涼化が内陸の照葉樹林帯から海岸へ人々を移住させて、縄文前期の文化が崩壊した。西日本の照葉樹林帯に比べて、東日本の落葉広葉樹林帯の方が、食料資源が豊かであったことがその理由であろう。

しかし4100年前さらに気候が寒冷化した時に、東日本中部山岳地方の縄文文化は衰退してしまった。すでに人口過密状態であったために、さらなる寒冷化により食料供給が困難になったのであろう。ところが西日本ではこの縄文時代後期から遺跡数が急増して、中部山岳地方とは対照的であった。縄文時代後期から文化の中心は西日本に移り始めた。気候は3000年前からさらに寒冷化し、縄文時代晩期に入り、2500年前に寒冷化のピークを迎えて、狩猟採集を主な生業とする縄文文化は崩壊した。

一万年続いた縄文時代は、縄文土器の紋様の違いから六つの時期、つまり草創期、早期、前期、中期、後期、晩期に大別されている。これらの時期が気候の冷涼化や寒冷化、その影響を示す海水面の低下時期に一致している。このことは気候変動と文化の変化の間に強い相関性があることを示している⁴⁰。気候変動によって自然生態系が変化した時、その自然生態系に強く依存する狩猟採集社会は、その変化に

対応できる生活様式をもつ文化とそうでない文化に分かれた。それが東日本と西日本の文化の対応に表れたのだろう。そしていずれの縄文文化も適応できない時に、狩猟採集社会の文化が崩壊し、大きく変容することを迫られたのである。

(3) 西日本における縄文後期・晩期の農耕

縄文時代の気候変動による危機は西日本と東日本に異なる結果をもたらした。特に縄文時代後期の冷涼化にもかかわらず、西日本の文化はさらに存続することができた。そして晩期には西日本も縄文文化を維持できなくなったが、新たな弥生文化が西日本の照葉樹林帯から興ったのである。その弥生文化の稲作農業が始まる前の縄文時代後期・晩期に、雑穀を栽培する焼畑農業が西日本の照葉樹林帯に起きた、と佐々木（1970:214）や安田（1989:98）は主張する。西日本でこの時期に雑穀の焼畑農業が行なわれた痕跡はまだ不十分なようだが、縄文前期以降の西日本には常に農耕への指向が存在しており、気候悪化の影響に対処するために狩猟採集の割合を減らして、人工的な栽培をさらに発展させたと考えるのは無理ではない。照葉樹林の食料生産性の低さのゆえに、農耕の片鱗を持ち続けてきた西日本の生業が、気候変動というインパクトに対応する上で、逆に有利になったのであろう。

2. 弥生文化興隆への動き

(1) 渡来人と弥生時代の始まり

日本列島の東西で縄文文化が終わり、弥生文化が興るのは西日本からである。それは本格的な農耕社会の開始である。稲作農業が西日本から始まったのは、西日本の縄文文化がすでに農耕への指向を備えていたことと同時に、大陸からの渡来人の影響が大きいと考えられている。福岡県の板付遺跡では2400年前の環濠集落が発見された。この遺跡からは堀に囲まれた水田の跡や炭化米が発見された。山口県の2200年前の土井ヶ浜遺跡からは350体余りの人骨が発見された。この人骨や福岡空港で発見された人骨は、明らかに縄文人の特徴とは異なり、この時期の中国山東省の墓で発見された人骨と特徴が同じである。すなわち弥生時代初期に西日本で水稲耕作を営んでいた人々のルーツは中国大陸であった。弥生時代初期の数百年に亘って、中国大陸の各地からそれまでにない規模で、稲作文化を携えて日本列島へ渡って来た人たち、すなわち渡来人がいたのである。日本列島の他の土地にも渡来人はいたのであろう。し

かしすでに照葉樹林が切り開かれて、農耕の基盤の整った西日本が、稲作に最も適した定着しやすい土地であったと思われる。また当時は比較的lowかった西日本の人口密度も、渡来人の入植を容易にしたりであろう。

(2) 渡来人と稲作文化の東進⁴¹

生産性の高い稲作によって渡来人は着実に人口を増やした。福岡県では渡来人の墓の数が100年間で100倍に増えている。この稲作農業を生業とする弥生文化は日本列島を東に向かって拡散してゆく。日本列島の土着の縄文人は、新しい文化にどのように対応したのだろうか。新文化受容のプロセスはスムーズではなかったようである。その証拠の一つは、弥生時代の集落には外敵から守る土塀や堀が巡らしてあることである。そのような外敵に備えた施設は縄文時代の集落にはなかった。二つ目は渡来人系の集落から戦いに使用するヤジリが発見されたことである。その渡来人は大阪平野の河内湖に2300年前にやって来た後、わずかに数十年間で縄文人の人口を上回るほど増加した。さらに1997年に発見された神戸・新方遺跡の縄文人系の人骨には石のヤジリが打ち込まれていた。縄文文化には戦争や人を殺す武器はほとんど存在せず⁴²、その武器や戦争は渡来人が新たにもたらしたと考えられてきた。このような事実から、稲作文化の東進は縄文文化との間に緊張や摩擦を伴っていたと想像される。

渡来系の人々による稲作文化の拡大は濃尾平野まで進み、ここで東進が一時的に止まる状態が200年間続いた。当時の縄文人系人口の85%は東日本に分布しており、縄文人の高い人口密度と深い森に阻まれて、容易にそこから東へ行けなかったようである。西の渡来系と東の縄文系の膠着状態が続いたのである⁴³。

そのうち西と東の膠着状態が終わり、互いに交流する進展が起きたようだ。神奈川県小田原の中里遺跡では、縄文系と渡来系の人々が平和に共存した様子がうかがえる。中里遺跡は2100年前の大規模な水田集落である。紋様のない土器と複雑な紋様の土器など、この遺跡では渡来系と縄文系の道具が混在して発見されている。しかし戦いを示すヤジリなどはほとんど発見されていない。渡来系と縄文系が協力して集落を営んだ様子が分かる。このようにして渡来人文化と縄文系文化が交じり合った弥生文化が生まれて発達したのである。

(3) 稲作普及後の東西の生業

弥生時代に入って人々は狩猟採集から稲作農業に全面的に切り替えたのだろうか。そうではなく東日本と西日本の生業には、それぞれの縄文時代の伝統が続くことになる。安田に(1989:100)よれば、弥生時代中期の東日本、畿内、北九州の遺跡における花粉分析の結果がそのことを示している。すなわち東日本ではイネの他にクリやドングリなど堅果類の利用が依然重要な位置を占めている。畿内ではイネが中心であった。しかし北九州ではイネと同時に畑作物の比重が大きい。これは縄文後期・晩期に栄えたと考えられている、雑穀を栽培する焼畑農業の伝統の痕跡を示すものかもしれない。このように弥生時代中期においても、依然として縄文時代の文化的伝統が継続している。一般に「農耕民」はその生業においてかなり広い生産活動を行っている。「農耕民」は農耕に従事するだけの民ではなく、狩猟採集や漁労なども副業的に組み合わせて生計を立てることが多い。縄文時代の伝統は、近代まで続いた焼畑農業や東日本の狩猟、山菜を利用する東日本の食文化、日本人の感性に宿る自然との一体感など、有形無形の文化として数千年以上も引き継がれてきた。

3. 時代変化の意味

縄文人たちはなぜ狩猟採集から稲作農業に自分たちの生業を変えたのだろうか。彼らが生業を変えた時期に日本列島で起きたこと、つまり気候変動や渡来系のもたらした文化の東進などについて先に説明した。ここでは一万年続いた狩猟採集の文化が、水田稲作の農耕文化に変容することを可能にした、縄文社会の内外の要因について整理したい。そしてこの時代の変化の意味を考えたい。

縄文文化から弥生文化への変化は農業社会の始まりである⁴⁴。農業の開始は人類最初の経済革命である。この革命を引き起こした原因は人口圧力であると考えられている⁴⁵。もし人口圧力が原因であれば、農耕文化は西日本ではなく東日本から興っていたはずである。しかし事実は逆であり、日本列島における農業革命は人口圧力のみで説明できるほど単純ではない。縄文時代後期・晩期から弥生時代初期にかけて、時代変化の原因になったと思われる要因を以下に挙げてみよう。

気候：冷涼化による気候の悪化。それは海水面低下つまり海退現象を引き起こす。海退現象によって沖積層上部層の堆積（造平

野運動)が活発化した。それは農耕用の土地利用を促進した。

資源：冷涼化・寒冷化によって動植物が減少して食料資源が欠乏した。

社会：食料不足で需給アンバランスが生じて、社会的緊張が高まったと考えられる。縄文文化の狩猟採集技術を革新して、食料生産を増大する動機が社会に内包されていた。

生業：自然の恵みが少なく狩猟採集による人口支持力が小さい西日本の照葉樹林帯と、それとは逆の東日本の落葉広葉樹林帯に異なる文化。そのため人工的な農耕によって寒冷化に対応しやすい西日本と、狩猟採集の比重が大きく寒冷化に対応し難い東日本に異なる生業。

人間の自由：自然的な要素に大きく制約される狩猟採集に対して、人工により自然的な要素を緩和できる水田農耕は、縄文文化が崩壊する過程の後期・晩期の社会にとって、人間の自由を拡大する大きな可能性が秘められた選択肢であった。天候不順など自然条件に左右される不自由を克服する欲求は、人間の本然的な衝動であろう。

渡来人：渡来人がもたらした水稻農業技術と農業社会の社会構造。すなわち社会の階層構造、新たな社会組織(政治・経済・文化面)、さらに戦争や武器など。また新たな自然観や世界観などももたらされたであろう。

このように整理してみると、縄文社会の維持を困難にするような、内的と外的な「変化」が高まり、それに対する縄文社会の「対応」が、この文化変容の内実だったのではないだろうか。すなわち縄文社会内部に変動の要因が存在していたところに、気候変動と渡来人という外的なインパクトが作用して、縄文文化が変容したと考えるのが自然であろう。どのような社会でも単独で存在し、単独で変化するものではない。周辺諸集団との関係性の中で、それぞれの集団は何らかの役割を演じて、存在を維持し、あるいは変化を遂げる。縄文晩期にいたる以前に、すでに中国大陸の農業社会との交渉は行われていた⁴⁶。しかしそれは未だ縄文社会を大きく変える力にはならなかった。自然環境および縄文時代の文化

や社会の条件がそろった「時」ではなかったのである。縄文後期・晩期に至って、渡来人の外的インパクトが縄文社会の内的条件とかみ合ったために、農業革命という日本列島の社会的な大変動を引き起こしたのであろう。

縄文社会は渡来人の文化をスムーズに受入れたであろうか。先に述べたように渡来人と縄文人の間には摩擦や紛争があった。つまり縄文人は稲作を導入した渡来人を最初拒否したようであり、狩猟採集経済から土地生産性の高い農耕経済へ、縄文社会が自動的に移行したとは考えにくい。しかし、一旦農耕社会が土地生産力の優越性を示した後は、その農耕技術の普及は次第にスムーズに進化したかも知れない⁴⁷。渡来人勢力が次第に西から東へ拡大したことに、稲作文化の農耕経済と社会組織の力の優越性が表れているのではないか。

縄文文化が弥生文化に変化したのは、このように内外の「変化」に対する縄文文化の「対応」であったと見なせると思う。それはすなわち弥生時代は単に渡来人の文化が拡散したのではなく、縄文人と渡来人の共同作業によって、新たな弥生文化が創造されたとも言えるだろう。

V. 人間と自然の交渉

冒頭に述べた筆者の問題意識に対する答えが見えてきたように思う。縄文人から何を私たちは学べるだろうか。現代の私たちに突きつけられた課題一人と自然の共生—に対して、縄文文化は何を示唆するだろうか。第I章から第V章で得られた知見に基づいて、本章ではこの問いについて考えてみたい。

1. 人間と自然の緊密な関係

本稿の最初に述べたように、筆者が明らかにしたかったことは、文明化以前の人と自然の関係とそれが示唆する意味である。第I章から第III章に述べたように、縄文文化はしっかりと「人と自然の関係」の上に築かれていたと考えられる。縄文時代の文化とは、狩猟採集によって森・川・海の自然を利用するべく発達した生活様式である。最初は豊富な自然資源に恵まれていたが、狩猟採集の生計手段による限り、それぞれの地域で人口が飽和する状態にやがて近づいた。地域の自然と人口集団の間で、さらに隣接地域の諸集団の間で緊張関係が生まれ、社会的な秩序を発達させて、それぞれの地域で自然と人々がダイナミックに共生する関係が実現した。

人と自然の関係において縄文社会は幾多の変動を経験した。縄文社会が自らのサバイバルをかけた「対応」を必要としたのは、気候の悪化による自然環境の「変化」であった。東日本と西日本のそれぞれの地域で、縄文人は居住地を放棄して移動したり、生業を自然条件に適應させたりして、狩猟採集社会の枠の中で対応して縄文文化を維持し発展させた。そして縄文後期から晩期にかけて、縄文文化を基本とする生業と組織では社会を維持できなくなったのである。縄文社会の変容という内的要因や、渡来人と気候変動による外的要因が絡み合った結果が、一万年続いた縄文時代の終焉であろう。

2. 自然を人工化する人間

縄文文化から弥生文化への移行において、人と自然の関係はどのように変わったか。人と自然の関係にはさまざまな側面があるので、生業についてそれを纏めてみよう。縄文人はできる限り多種類の動植物を生活資源として利用した。弥生文化は農耕文化であり稲作が基本的な生業である。稲作の他にも副業的に狩猟採集活動が行なわれたものの、社会形態としては農耕社会への転換が進んだ。稲作社会では人と自然の関係に大きな変化が起きたのではないか。つまり縄文社会との対比で言えば、多様な自然生態系との関わりから、稲をはじめとする少数の植物種との関わりへの変化である。当然、自然生態系との関わりが少なくなり、自然への理解や共感も限られるようになるだろう。

縄文文化から弥生文化へ移行するに従い、そのように人間と自然の接点（インターフェース）が減少したと思われる。広範囲の自然生態系へ人間が依存した縄文文化から、人間の自由度をより高める農耕活動へ生産様式が変化したことによって、人間と自然生態系のインターフェースが減少したであろう。その減少傾向は、農耕文化から今日の都市文明へと、2000年の間にさらに続いている。自然との関係が比較的大きい農業においてさえ、人工的な要素を拡大して近代農業へ発展してきた。豊かではあるが厳しい自然と人間は共存していた。しかし、人間の自由度を高めるために、自然の脅威を克服し、自然的要素を減らす努力をしてきた。その結果、自然は非常に乏しいけれども、便利で人工的な環境の中で生活する現代文明を築いてきた。

人間と自然のインターフェースの減少化は、ホモ・ファールベル（工作する人）あるいはホモ・サピエンス（知性ある人）などの人間性の表れであろう。

それは他の生物との比較で明らかである。その人間性の表現の結果、その延長に現代の環境問題があると言えるだろう。インターフェースの減少化とともに、自然環境の劣化が進展していることも事実である⁴⁸。したがって現代の環境問題の根源は人間そのものにあり、時代的には先史時代にまで遡ることができる。第I章で述べたように、人間が自然に働きかけて人工化した原初形態は縄文文化にもあり、その動機は人間そのものの中にあると言えるだろう。

農耕文化において人間は、森林を開墾し土地を耕して、畑や水田の人工施設を作って、作物を育てる。それは人間による自然支配の開始であると言われる。自然破壊は農耕文明から始まったと人々が主張する根拠である（梅原1991:227;1993:27）（安田1995 a:170-195）。農耕以前の狩猟採集文化において、人々は自然破壊と無関係で、自然の恵みを単に収穫しただけなのか。そうではなかった。縄文人がクリやドングリの林を人工的に作っていたことは先に紹介した。ヒエやアワの雑穀類を栽培していた可能性も高い。動物の人工的な家畜化も行なわれていた。道具を製作して、積極的に森林を伐採して集落を築き、生活を便利にする努力も行なった。自然への働きかけの程度には、狩猟採集と稲作農業の間に明らかな差はあるが、それが質的な違いであるとは思われない。土地を耕して自然を改変するか否かという、人間が自然に働きかける現象面にとらわれてはならない。

3. 自然と交渉する縄文人

縄文文化においても、人間は自然に働きかけて自然を改変したが、大事なのはそのような目に見える現象ではない。人が自然をどのような対象として認識したかであろう。人は生きている限り必ず自然環境に働きかける。それは生物としての人間の宿命でもある。生物による自然への働きかけを「環境破壊」と見なして否定すれば、どのような生物も生きることにはできない。だから自然をありのまま利用するか、あるいは自然を改変して利用するか、ということではなく、問題は働きかける自然をいかなる対象と捉えるかである。そしてそのような捉え方が、人と自然の共生を可能にするか否の分かれ目になるかも知れない⁴⁹。

先に第III章で述べたように、縄文人は自然を循環する「生命」として捉えたと考えられる。それは人間と自然の間の互酬関係から理解できるように、人間が「交渉する」相手としての存在であった。生命

としての自然は、単に生活の資源を生産・供給する存在というよりも、その「主体性」を尊重して「交渉」する相手として認識されていただろう。

縄文人にとって自然は生きた命であり、食べさせてもらったなら、その恵みに対して返礼をする。生命系の豊穰なる循環を祈って供物をささげる。山野河海の神々には畏敬の念を抱き、その力に恐れ感謝する。それは感情に満ちた世界であろう。人間が欲張るとしつぺ返しをされる、怖い存在でもある。生きた相手であるから、人間側は緊張状態にあるし、人間のためになるよう「交渉」もしなければならない。自然はそのような「交渉相手」であるから、人間と自然を取持つ「贈与原理」が不可欠である。それは人と自然の豊かな関係性に満ちた世界であろう。縄文人にとって自然はそのような存在であったと考えられる。

そして現代の私たちはどうであろうか。人類は農業革命によって「文明化」を開始したが、その文明化の行き着いたところに、現代の「環境問題」が待ち構えていたのである。現代の文明が行き詰まっている今日、文明開始前の縄文文化から学ぶものがあるのではないか。それは人間が自然と相対する姿勢であると私は考える。

現在、人々は異口同音に「人間は自然の一員である」と言う。しかしそれは何を意味するのだろうか。自然を支配しようとしてきた人間の態度へのアンチテーゼであろう。それは正しいが、まだ不十分であると思う。人間は自然の一員であると同時に、「生命的存在」として自然と相対する姿勢が私たちに必要であると思う。その姿勢には「人間は自然の一員」であることよりも、多くの意味が含まれていると思う。そのような自然観あるいは世界観には、地域や時代を超えた普遍性があると考えられる。

おわりに

縄文時代の人々の生き方を通して、当時の人間と自然の関係の在り方を探ってみた。縄文時代の文化は、森林が発達した時代に狩猟採集により、森・川・海の自然を利用して発達した生活様式である。それは自然資源の単なる享受と利用ではなく、自然環境に対して人工的に働きかけることにより、自然の資源化を促進した。最初は豊富な自然資源に恵まれていたが、狩猟採集の生計手段による限り、それぞれの地域で人口が飽和する状態に、やがて近づいた。地域の自然と人口集団の間で緊張関係が生まれ、さ

らに隣接地域の諸集団の間でも緊張関係が生まれ、その過程で社会的な秩序を発達させて、それぞれの地域で自然と人々が共生する関係が実現したのである。

そのような共生を可能にした縄文人の自然観について考えてみた。縄文人は自然を「生命的存在」と捉えたのではないだろうか。その自然は循環する生命としての存在である。そして人間が「交渉」する相手である。縄文人の最大の願いは、彼らの生活を支えるその自然の豊饒である。縄文人にとって自然は生きた存在であり、自然のおかげで食べさせてもらい、その恵みに対してお返しをする。自然の循環と豊穰を祈って供物をささげる。山野河海の神々には畏敬の念を抱き、その力に恐れ感謝する。このような自然観や生命観が縄文人の世界観ではなかっただろうか。

縄文時代の人と自然の関係や縄文人の自然観を浮き彫りにできたように思う。現代の人間と自然の関係と比較してみると、縄文時代における自然観、すなわち「生命的存在」として自然と相対する感覚、自然と対話する姿勢、自然とダイナミックに交渉する姿勢、それが現代の人間が決定的に忘れたものであると思う。そこには「人間は自然の一員」とする見方よりも豊かな内実がある。現代社会でそのような自然観の記憶を取り戻すことができるだろうか。そしてそれをどのように実践できるだろうか。それについては別の機会に論じることとしたい。

注

1. 梅原(1993:27)は、狩猟採集文明では人間を自然の一員と考えるが、農業牧畜文明は人間が自然との関係を乱していくと述べている。
2. メソポタミア文明や地球海文明の衰退の原因として、安田(1995)は森林や農地の荒廃を指摘している。
3. 梅原(1991)は、狩猟採集時代の自然崇拜や循環の思想が、環境問題の解決に必要であると主張している。
4. 照葉樹林は亜熱帯から暖温帯にかけて見られる常緑広葉樹を主とする樹林。一般に葉は深緑色、革質・無毛で光沢があるので、このように名づける(広辞苑)。
5. 旧石器時代の人類は狩猟採集を営んでいたが、それと縄文時代の狩猟採集は明らかに異なる特徴をもっている。すなわち旧石器時代には大型獣が好んで狩猟されたが、縄文時代に入ってから、森や川や海などの多種多様な動植物が人間の食料として利用された。縄文時代には多様な自然資源から食料の獲得が行われたのである。縄文

- 人はなぜそのような食料獲得戦略を採ったのだろうか。それは縄文人の選んだ自然との共生戦略であったと考えられる。
6. 安田 (1995:33) は縄文時代早期・前期・中期における日本列島の植生分布を示した。
 7. 北村 (1995:303) は照葉樹林帯と比較してブナ帯の自然の恵みが豊富であることを強調している。
 8. 縄文時代の気候変化の中でも5000年前に始まる冷涼化は世界的な気候変動の現れである。エジプト文明、メソポタミア文明、インダス文明の興隆は、気候の冷涼化に伴う乾燥化の結果であると安田 (1996:68-71) は説明している。つまり北緯35度以南の気候の乾燥化が、大河川沿岸地域に人口を集中させて、文明を誕生させる契機となった。
 9. 山田 (2000:127) は河内平野の形成過程について、縄文時代前期から古墳時代まで詳しく報告している。
 10. 小林 (1994:20-21) は縄文時代の可食植物について幾つかの研究例を紹介している。
 11. 小林 (1994:24) によれば、居住地周辺的生活領域で獲得できる、ほとんどすべての獣類や魚介類を、縄文人は利用していたようである。
 12. なぜなら少数の限定された米や麦が栽培される農耕文化と、多種多様な動植物資源を利用する縄文文化は基本的に異なる思想に基づくからである。狩猟採集経済が栽培の要素を持つのは当たり前のものであり、それは農耕経済に狩猟採集の要素を持つのもと同じである (小林1994:31)。
 13. 宮路 (1999:24-43) は先史狩猟社会の遺跡から縄文人の食生活を復元し、人々の居住形態、食料獲得戦略、経済活動などを明らかにしようとしている。
 14. たとえば小池 (2000:107) は、森林資源利用の道具類の工夫などを通して、定住化が進んだことを述べている。
 15. 人口500人説に対しては集落に関する概念の違いから、より少なく推定する反対論がかなりある (藤尾2002:18-22)。
 16. NHK テレビのNHK スペシャル「日本人はるかな旅 第3回 海が育てた森の王国」(2001) では三内丸山遺跡の研究結果が報道された。
 17. 小池 (2000:34) は日本第四紀学会による縄文時代中期の日本列島の遺跡密度分布を紹介している。
 18. 小池 (2000:35) が紹介した縄文中期の遺跡数の推移によれば、長野県の遺跡の数は約4500年前の最大時期に2000ヶ所以上となっている。それに対して関東の他の県では同時期に多くて数百ヶ所である。
 19. 山内 (1994:124) による。ボスラップ (1991:25) は現代の狩猟採集民の人口密度は1~3人/平方キロメートルとしている。
 20. 小池は、先史時代の食料資源と人口の間のバランス関係をさぐるために生業動態分析を行なった。
 21. 宮路 (1999:28-29) 大阪府国府遺跡の分析による。
 22. 宮路 (1999:29-33) 大阪府讃良川遺跡の分析による。
 23. 宮路 (1999:34-35) 大阪府森の宮遺跡の分析による。
 24. 山田 (2000:109-110) は縄文人の定住開始から、集落・社会関係・集会装置などの形成にいたるプロセスを整理している。
 25. 備蓄の多寡が人間関係を不平等にする可能性がある。実際に、縄文遺跡からは普通の労働ができないほど、多量の装身具をつけた人々の存在が明らかになっている。但しそれは階層の存在を示唆しても、必ずしも人と人の支配関係を意味しない。北アメリカ北西海岸先住民は農耕を行なわないが、定住して階層化が進み、首長と三つの階層と奴隷が存在していた (大塚1994:269)。つまり狩猟採集社会が必ずしも平等社会であるとは限らない。
 26. 高知県土佐市の居徳遺跡群で、縄文時代晩期に殺傷、解体されたとみられる人骨が出土した (中国新聞, 2002年3月20日)。これは集団戦闘の可能性を示唆する最古の遺物であり、縄文時代の遺跡では初めての出土である。これまで戦争のない、平和な時代と考えられていた、縄文時代の見直しにつながる発見である。
 27. 縄文時代に暴力や戦争がまったくなかったわけではない。戦争と暴力については佐原と小林によって興味深い議論が展開されている (佐原・小林2001:55-94)。
 28. 安田は「呪術や儀礼の遺構や遺物の存在は、縄文時代中期に人口が極大に達し、異常に高まった社会的緊張をやわらげる文化的装置が必要であったからだろう」と佐々木の考えを紹介している (1996:74)。また安田は「縄文時代の社会は不平等を顕在化させることを回避したのではないか」と佐原の説を紹介している (1996:76)。
 29. 小山は「近隣の村から着飾った大勢の人が集まり、物語を歌い踊り、笑いさんざめきながら、賑やかに祭りを行っていた様子が浮かんでくるような気がします」と縄文社会の情景を想像している (1995:98)。
 30. 小林 (1994:41-42) は土偶、石棒、石剣、石刀などの機能や用途を今日の我々が類推できないのは、縄文人とは世界観が異なるからであると説明している。
 31. 小林 (2001:7-11) は縄文土器に表現された「集団が一致団結して前面に押し立てて来ている主張が」縄文人の世界観であると述べている。
 32. 縄文土器に表わされたスパイラル模様は、循環の世界観の表現として理解されている (小林他 2001:38-43)。
 33. 小山 (1996:93) は蛇を万物の母と見なす、オーストラリア・アボリジニの神話の例を紹介している。

34. 火焰式土器の実物や写真を見ると実際にそのような印象を覚える。
35. 芸術家岡本太郎は縄文土器を「美の呪力」と表現している(小林他 2001)。
36. 吉田によると「土偶というのは、殺されると死体から焼き畑で栽培される作物などが生じてくるような女神であって、だからこそそれを像に作って壊すことがなされたのだ」との説を紹介している。
37. 藤尾(2002:29-45)は土偶の繰り返される出現と消滅に焦点を当てて、土偶の用途に関する説を整理している。小杉(2002:133-180)は土偶の製作技術的な変化の趨勢を詳細に整理して、遮光器土偶全般は、「再生」あるいは「再生産」を象徴する超人間性が造形表現されたものであり、幅広い祈願を目的として製作された象徴的器物であると結論している。
38. 安田(1989)には縄文時代の東日本と西日本の特徴が詳述されている。
39. 豊富な食料資源を反映して縄文時代前期・中期の人口の90%は東日本に分布していた。
40. 福澤(2000:28-30)によると縄文土器の紋様の違いから編年された縄文草創期、早期、前期、中期、後期、晩期と、水月湖の湖沼堆積物から検出された1万2000年前、9500年前、7000年前、5500~5000年前、4500年前、3000年前の海水準低下時期と一致する。
41. NHK テレビのNHKスペシャル「日本人はるかな旅 第5回 そして日本人が生まれた」(2001)は渡来人による稲作の伝播や縄文人の関わりについて報道した。ここではその内容を参考にした。
42. 縄文晩期に集団間の戦闘で殺された人骨が発見されている(今村2002:57)。
43. 小林によれば東日本と西日本の境目あたりで縄文人による「攘夷運動」が起きていた(佐原・小林2001:73)。
44. 縄文時代に植物資源の栽培は行なわれており農耕技術は存在していたと思われる。狩猟採集社会に農耕技術が存在することと、弥生時代になって農耕社会が成立することは異なる。たとえば山田(2000:116-126)は単に農耕技術を利用する社会と、農業に基盤をおく社会は異なる」と述べている。
45. 湯浅(1993:30-35)は、狩猟採集民の人口の増大は移住、他集団からの横奪、技術開発の三通りの方法で対応されたとし、農耕技術の創造は新技術による対応であると述べている。
46. 山田(2000:123)によれば、中国の農業技術が拡散する可能性をもった時期は、3000年~4000年前と2200年前の2回あったと考えられている。
47. それは人間の欲望を解放した市場経済が、世界に急速

に広まっている現代の状況と対比される。

48. たとえば川や森と人間のインターフェースが減少すると、それらの自然環境を維持する努力がおろそかになり、環境汚染や自然の劣化が進行することは、現代において一般に見られる現象である。
49. ところが現代人は自然に影響を与える現象面に囚われてそれを「自然破壊」と思い込んでいる。そして人間が自然に影響を及ぼすことは避けられないから、結局は「自然保護」は無理であるという諦めに陥っているように思われる。

参考文献

- 伊東俊太郎. 1995. 『日本人の自然観』河出書房新社.
- 伊東俊太郎. 2002. 『文明と自然』刀水書房.
- 今村啓爾. 2002. 『縄文の豊かさの限界』山川出版社.
- 梅原猛. 1991. 『[森の思想]が人類を救う』小学館.
- 梅原猛. 1993. 『森の文明と草原の文明』伊藤俊太郎・安田喜憲編『草原の思想 森の哲学』講談社.
- 梅原猛. 1995. 「循環の世界観」伊東俊太郎編『日本人の自然観』河出書房新社.
- エスター・ボースラップ. 1991. 『人口と技術移転』尾崎忠二郎・鈴木敏央訳. 大明堂.
- 大塚柳太郎他. 1994. 「総合討論 新たな資源論を求めて」大塚編『地球に生きる3資源への文化適応』.
- 小野昭. 2000. 「狩猟・採集民は環境の影響の一方的な受け手か」小野他著『環境と人類』朝倉書店.
- 北村昌美. 1995. 『森林と日本人』小学館.
- 小池裕子. 2000. 「食料資源環境と人類」「人口増加と捕獲圧の増大—関東地方の縄文後晩期の狩猟採集民と環境との関係—」小野他著『環境と人類』朝倉書店.
- 小杉康. 2002. 「神像が回帰する社会」安斎正人編『[縄文社会論]』同成社.
- 小林達雄. 1994. 「縄文時代における資源の認知と利用」大塚編『地球に生きる3資源への文化適応』.
- 小林達雄. 2001. 「岡本太郎と縄文の素顔」『岡本太郎と縄文』川崎市岡本太郎美術館.
- 小林達雄・村田慶之輔. 2001. 『岡本太郎と縄文』川崎市岡本太郎美術館.
- 小山修三. 1995. 「縄文の精神文化をさぐる」伊東俊太郎編『日本人の自然観』河出書房新社.
- 佐々木高明. 1970. 『熱帯の焼畑—その文化地理学的比較研究—』古今書院.
- 佐原真・小林達雄. 2001. 『世界史のなかの縄文』新書館.
- 福澤仁之. 2000. 「堆積作用と環境」小野他著『環境と人類』朝倉書店.

- 藤尾慎一郎. 2002. 『縄文論争』 講談社.
- 宮路淳子. 1999. 「先史採集社会のテリトリー—縄文時代の
大阪湾沿岸地域を例に」『自然はだれのものか』昭和堂.
- 安田喜憲. 1989. 『森林の荒廃と文明の盛衰』 思索社.
- 安田喜憲. 1995a. 『森と文明の物語』 ちくま新書.
- 安田喜憲. 1995b. 「縄文時代の時代区分と自然環境の変動」
伊東俊太郎編『日本人の自然観』 河出書房新社.
- 安田喜憲. 1996. 『森のこころと文明』 NHK 出版.
- 山内昶. 1994. 『経済人類学への招待』 ちくま新書.
- 山田昌久. 2000. 「農耕の出現と環境」 小野他著『環境と人
類』 朝倉書店.
- 山田昌久. 2000. 「後氷期の環境の多様化と定住社会の工夫」
小野他著『環境と人類』 朝倉書店.
- 湯浅赳男. 1993. 『環境と文明 環境経済学への道』新評論.